



ピースボート黄金アジア航海

「自衛隊よりボクラが行こうカ
ンボジア」をキャッチフレーズ
に、自称コクサイコーケンボー
ト・第十三回ピースボートが、参
加者を募集しています。今回はカ
ンボジアを中心に、ベトナム、香
港、マニラなどを十九日間かけて
回る予定。コースにはアンコール
ワットも組みこまれて、黄金アジ
アフルクルーズが348000円
より。（部分コースも七日間からあ
り）4月20日に博多を発って5月
8日に帰国。船上でのイベント
も、盛りだくさんに用意されてい
ること。今回の水先案内人
は、作家の石川好さんやフォトジ
ャーナリストの吉田ルイ子さん、
女優の工藤夕貴さんが予定され



ています。
切は3月20日（金）まで。お問
い合わせは03・3232・85
61ピースボート事務局まで。ス
タッフも募集中です。

立花ハジメ初の個展

昨年度は凸版印刷のポスターで
ADC最高賞を受賞した、グラフ
ィックデザイナーでありミュージ
シャンである立花ハジメさんが、
初めての作品展を開きます。一九
八八年から四年にわたって制作さ



れたタイポグラフィのシリーズ
は、すべてコンピュータで作られ
たもの。ご本人は「いまの道具を
使って古典を残したい」と言っ
ています。2月5日（水）から29日
（土）まで、ギンザグラフィックギ

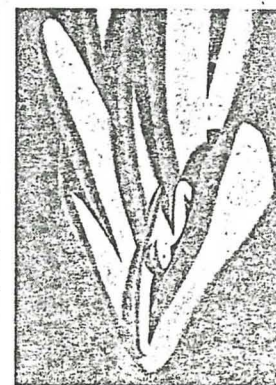
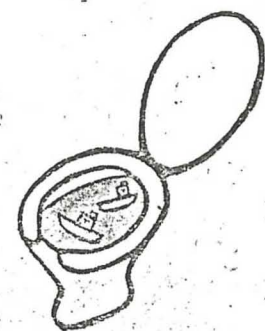
ャラリーにて。問い合わせ先0
3・3571・5206

世界エイズポスター展

99頁でのニッポンの女子大生に
よるエイズ試作広告展につづき
（17）、世界のエイズポスターを集
めた展覧会が開かれています。「世
界はエイズに真剣です」と題し
て、アメリカ、ドイツ、アフリカ
など約十五カ国のポスターが一
堂に。2月6日（火）まで電通ギヤ
ラリーにて。問い合わせは03・3
574・2545

チヨイス大賞展

今年で七回目を迎えるザ・チヨ
イス大賞展。「イラストレーショ
ン」誌上で紹介された読者のイラ
ストレーションの中から、今年は
絵本作家の長谷川集平さんやイラ
ストレーターの秋山孝さんら六人
の審査員が優秀作品を選出しまし
た。東京展は2月17日（月）から3
月6日（金）までクリエイションギ



ャラリーにて。大阪展はギヤラ
リースプーンにて4月に開催予定。
問い合わせ先03・3263・3
518。

（右・大賞「TOTO」平沢一平／
左・優秀賞「クロールでいこう」開
楽智治）

12月号92頁に掲載した「ドラマ
チック山口」のポスターは、JR
東日本でなくJRグループの制作
でした。間違いを訂正し、お詫び
します。

糸井 みなさん、こんにちは。この広告学校の講義は、僕も一人では何度もしているんですが、今回からは対談も、という話があったので、まずは最初に、敬愛する橋爪大三郎さんをお呼びしたわけですね。タイトルは「宗教・言葉・セックス」でしたっけ——

橋爪 違う、違う。(笑)

糸井 そうですね。「言葉・広告・宗教」でした。(笑)今日は僕も生徒の側に座るくらいのもりで、対談をしていきたいと思っていますが、まずは橋爪さんがこの会場へ来る途中の電車の中で作ったというレジュメがあります。ですから、橋爪さんの、今日はこんな話をしたいというあたりをちょっとお聞きして、そこからキャッチボールをしていくというふうにしましょうか。では、橋爪さん、よろしくお願いします。

橋爪 今日はお招きいただきありがとうございます。実は私、こんなふうにお客さんのいる前で対談、というのは初めてなんです。だから、やり方がよくわからないので、どうしても普段やっている大学の講義に近くなっちゃうのは大目に見ていただくことにして、まずはあえて講義風に、僕の考えていることを少しお話ししたいと思います。順番でいきましょう。最初は宗教ですね。

さて、宗教とは、一体なんなのだろうか。一番基本のところから考えるために定義から出発すると、《ある「別種の現実」を信じさせること、信じさせる力》これが宗教というものです。そして、別種というからは、別種じゃない「普通の現実」もあるわけで、これは生まれてから大人になるまでの間に最低限理解することのできる、誰でもが知っている現実のことですね。けれど、世の中というのは、本当にそれだけでできているのだろうか。もう一つ、「普通の現実」を超えるものがあるんじゃないだろうか——こういうことも、人間は考える

定義が終わったところで、次に応用問題に行きましょう。じゃあ宗教は、どうやって人に「別種の現実」を信じさせるのか。これができなければ、宗教は宗教でなく、ある人がヘンなことを考えたというだけ

言葉の力と無言の力を使い分ける

橋爪 このテクニックには二つあります。一つは言葉の力ですね。私は神様の言葉を聞いた、霊を見た、こんなふうな姿だった、私は人生の本当の意味を知った。なんでもいいたけれど、この世を超えた現実の存在を、なんらかの形で口にして信じてもらうわけです。人は説明しなければ、何を考えているのかが伝わらない。だから、これは最低限必要なことです。

ただ、それだけでは、おそらく宗教の説得力は生まれない。宗教というのには、一人一人の態度だと言いました。だったら、それ以外にも一つの力が必要です。それは、大変逆説的だけれど、無言の力、いいものだと思います。何か意味ありげな沈黙かもしれないし、不思議な自然現象かもしれない、ある感覚かもしれないけど、とにかく言葉にならない非常に大きな力を感じること、この、言葉と無言の力の二つの要素がうまく組み合わせることによって、「別種の現実」を人に信じさせることができる、これはすべての宗教に共通しているんです。

ただ、宗教ごとに作戦は微妙に違っていて、ある宗教は言葉の力に非常に頼ろうとするし、別な宗教は無言の力に非常に頼ろうとする。例を挙げて説明しましょうね。まずヨーロッパの宗教の本来元として、ユダヤ教やキリスト教がある。この宗教の構造について考えてみると、信者であるならば必ず読まなくてはならないテキストというものが決まっています。テキストだから、もちろん手で書いてある。これをしっかり読んで、その意味するところをよく理解するのが一番大事な信者の務めであり、そういう意味で言葉の力に非常に頼っているわけ

ことができる。それは、超常現象だったり目に見えない霊の世界だったりするし、ここではない非常に遠くのあの世だったりするけれど、とにかく日常ではない何か、「別種の現実」が存在するという発想が、宗教には特徴的だと思います。

で、この「別種の現実」についてですが、宗教を信じていない人から見ると、宗教を信じている人の言うことはわけがわからない、本当なんだろうかと思う。つまり、宗教を信じていない人にとっては、信じている人の言うことはフィクションであり現実じゃない。だけど、実はここが境目でして、そんなふうにはフィクションだと思っていなかったとが、あるとき本当だと思えるようになる、ありありとした現実になる。霊がいると信じれば本当に思えるように思えてくるし、神様がいると信じれば、本当に神様の目がわれわれを見ていると日々肌で感じるようになる。そんなふうには「別種の現実」が、「普通の現実」と同じくらいリアルな現実になる、この世界の一部分になることが宗教であり、宗教の持つ力の本当の原因なんです。つまり、それは確固たる現実ですから、人間を支配するし、その人の人生に確実に影響を与えていく。ものの考え方も変わり、生活も変わらざるをえない。そういう大きな力を人間に対して持つことができるのが、宗教の根本的な構造なんです。

さっき「分かれ目」と言いましたが、ある人の考えたことがフィクションなのか現実なのか、それはその話を聞いた一人一人が自分で決めることはなりません。例えばどこかで霊を見た、神様は必ずいる、それを信じるか信じないかは決断であり、ですから、宗教というのは態度の問題でもあるんですね。知識の問題ではなく態度の問題。そうして、心からそうなんだと思うところから、宗教の力というのは生まれてくるわけです。

けで終わってしまいます。他の人にも現実だと受けとられ共通に理解されていくには、それを信じさせるテクニックが必要になってくる。

糸井 わかるわかる。

です。この大事なテキストを、普通は聖書と言いますが、じゃあ、この聖書に何が書いてあるかというと、ユダヤ教とキリスト教では若干違います。

ユダヤ教は、キリスト教よりもイスラム教によく似ています。ユダヤ教の聖書はキリスト教が旧約聖書と呼んでいるものであり、イスラム教の聖書はコーランですね。この二つに共通しているのは、簡単に言うと、書いてあるのが契約だということ、神様と人間との間の契約だということです。一日三回なり五回はメッカの方角に向かって礼拝をしないとか、断食月にはお昼は肉も野菜も食べてはいけませんとか、余分なお金があったら貧乏人にも分け与えなさいとか、そういうことがいろいろ書いてあって、もしこれを守ったならば、みなさんの幸せは私が保証しましょう、というふうに神様からのおまけがついている。

だから、神様を信じるということは契約を信じていることで、契約通りに生活を送らなさいいけない。そうすると、それは日常生活の掟だから、そのまま法律になる。それが、ユダヤ法やイスラム法ですね。そして、そうすると、当然法律を破る人も出てくるから裁判所もでき、裁判官は法律学者が務めることになる。イスラム世界での法律学者の社会的地位は非常に高く、場合によっては王様より高かったりする。イランのホメイニ師なんかもイスラム法には詳しく、国中の人の生活を指導する立場にあったでしょう。そういう知識人の中の知識人、政治家の中の政治家、戦争のような非常時には最高司令官まで務めかねないのが法律学者であり、イスラム世界ではリーダーになるわ

けです。

その点、ユダヤ教はちよつと違っている。ユダヤ教徒は追っぱらわれて国というものを作れなかつたので、強力な政治的リーダーを持たなかつたんです。ただし、それぞれの集団に知識人のリーダーがいて、個人の法律相談に乗ってくれたりするから、基本的な構造は、やっぱよく似ている。これが、イスラム教やユダヤ教の言葉の力ですね。ただ、この場合も、神様に対する畏れや、奇蹟と呼ばれる普通では説明できないような自然現象を信じることで、つまり、無言の力によって、言葉の力は保証されているわけです。

それに対して、キリスト教はどうか。キリスト教徒の作った聖書は新約聖書ですが、これにはイエス・キリストという人が生まれた。この人は神の御子で、イエスを信じることによってわれわれは救われる。なぜならば、この人はわれわれの身代わりになって十字架にかかり復活したからだ、という話を書いてある。ここで重要なのは、契約の意味が変わっていることですね。法律なんか守らなくてもいい、神の御子であるイエス・キリストのことさえ信じればわれわれは救われる。そして、ユダヤ教やイスラム教より、言葉の力は少し小さくなった。しかし、この言葉は、今度は愛を伝える言葉になったんです。

ご存じの通り、キリスト教のテーマは愛ですね。神様は法律で杓子定規に人間を縛るのではなく、実は法律を超えたところでわれわれを救おうとしている。それが「愛」と呼ばれるものであり、人間同士もいがみ合わないで愛し合いなさい。そうすれば、やがて神様の国に入ってもらえるだろうという、広い意味での契約ですね。これは、非常に明快な、言葉の力と無言の力との組み合わせになっているんじゃないかと思います。

それから、もう一つだけ例を挙げるとすれば仏教ですが……（糸井さんに向かって）あの、チャチャ入れてもいいですよ。

糸井 いやあ、面白いから、つい聞いちゃって。（笑） どうぞ、先

その世界は、言葉が語られている世界と同時にしか存在しない。これはなかなか面白い構造で、このことは私の『仏教の言説戦略』（勁草書房）という本に詳しく書いてありますので、興味のある人はぜひお買い求めになって……と、話は宗教から広告に移行しつつあるわけなんです……（笑）

糸井 橋爪さんの中で一番難しい本だね。

橋爪 そういうこと言うと、買わなくなるじゃないですか。（笑）

とにかく、以上のように、言葉の外部にあるはずの宗教が信じようとしている現実というのは、実は言葉の内部で作られる。しかも、それ

言葉が最強の武器だつてみんな知ってる

糸井 橋爪さんと僕は同じくらいの年で、たぶん学校で同じような目に遭って——

橋爪 はい、はい。

糸井 こんなことをいまさら言うと、歴史を語るようでおかしいんだけど、僕は全共闘華やかなりし頃の学生で、僕は法政大学といういわば肉体を武器にしている（笑）、デモで一番前のやつはえらい、二番目のやつは勇気がない、と言われるようなところにいたおかげでこういう人になってしまった。橋爪さんは東京大学という、そういう発想のないところで運動に関わっていたおかげで、こういう人になった。まあ、そういう多少の出発点の違いはあるんだけど、とにかくいまのロシアの人たちが抱えているような、一体何から考えていいのかわからないという状況を、当時の若い学生たちは共通で抱えていたと思うんです。で、おそらく僕も、ごまかしごまかししながらも、それでもやっぱり何か考えないと、自分の過去も未来も否定されてしまふようなやせない気持をずっと持ってた。だけど、いまさら不良化もできないし、やくざも面白さの限界がありそうだし、というわけで広告屋になり、橋爪さんも自分の本の中で書かれていましたけど、何か

に行ってください。

橋爪 じゃあ、そうします。（笑） えーと、仏教での一番の問題は、「悟り」ですね。仏教には神様はいない、仏様しかいないんだけど、この仏様というのは、悟った人のことなんです。お釈迦様もそうだし、他の人間だって、悟ればみんな仏様になる。で、この「悟り」とは何かという、これが不思議な構造を持っているんですね。悟りというのは、悟ってみなければわからない。だから、これも、「別種の現実」の一種です。そういうものがあるとも言えるし、ないとも言える。態度の問題だから、あると思えば仏教徒だし、ないと思えばただの人。どうやって悟るかのマニュアルが書いてあるのがお経です。座禅を組めばいいと書いてあるのもあれば、お経を何遍も唱えればいいと書いてあるのもあり、山の中を走り回るのがいいと書いてあるのもある。チャート式もあれば、予備校中継みたいなのもあって、いろいろ種類があるんだけど、結局は悟れればいいわけで、どういうやり方でもいい。とにかく悟りをめぐるマニュアルを読んで、悟りをめざす修行をするというのが、仏教の構造なんですね。

ただ、ここで一度立ち止まって、悟りと言葉の関係を整理してみましよう。仏教の本質的なテーマは、悟りがあるということでした。そして、悟りというのは言葉では語りえぬ、ある実現された素晴らしい精神状態を指すらしいけれど、到達するまではわからない、やはり一つの「別種の現実」です。だけど、それではどうして悟りがあることがわかったのか。そう考えると、不思議なことに、悟りがあるということは言葉の中にしかないんです。だって、『言葉で語りえぬものがある』と言っているのは言葉でしょう。もし言葉を使わなかったら、言葉で語りえぬものがある、ということを考えることさえできない。つまり、この「語りえぬもの」は、言葉の内側にある。

言葉を超えたものがあるというと、われわれの現実の外側に、何か見たこともない素晴らしい世界があると思いきなりするけれど、実は

を信じさせるのは、言葉ではなく無言の力なんです。

これをちよつと広告にあてはめてみると、宗教における言葉の外部、神とか悟りとかいうものは、何か特別な価値のあるもの、のっぺりした日常に刺激を与える現実の奥行きになって、それはやはり言葉を超えたものなんです。そして、それは、やっぱり言葉のメカニズムによって作られる。広告を見ていいなあ、と思う効果は、広告の言葉で作られるわけですから。これは、仏教の悟りの構造と同じなんです。

というところで、ひとまず私の宗教論はおしまいです。

そういうものを抱えて社会学者になった。

つまり、僕は当時の自分たちの環境の中で、僕らを迷わせる、何を考えたらいいかわからなくさせる歴史の動きにぶつかって、悔しくて始めた世界を持つているんだけど、その点、いまの若い人たちは、僕らがかつて経験したような、自分にインパクトを与えるような歴史を持つていないんじゃないかと思うんですね。最近では湾岸戦争があったりしたけれど、自分は何で生きるのがとか、他人は何で生きるのが、人類は何で生きるのがというような、いままで考えなくてもすんだような問題を、遠くの現実をやすりにして考えなきゃいけない。その可哀想さは、いまの人たちにはとてもあるような気がする。ただ、考えないなら考えなくてもすむ、というのは僕らよりもまして、僕らは考えないと捨てばちになるしかない、というところまで追いつめられていた。仕方なく次の一步を踏み出すための何かを、それぞれの形で模索していたと思うんです。

で、橋爪さんは社会学者になって、社会や歴史の構造をちゃんと見てやりたいものだと思います、僕は自分をだましたものの、それが言葉だつたんだけど、その言葉という武器をもっと知るために広告屋になつ

た。結果的にだけね。なぜ、一列目で戦うのか、なぜ徹夜して配るためのビラを原稿を書くのか、そうしたものはやっぱり言葉で語られていたし、仕送りや食って学生という種族でありながら、世界のプロレタリア団結せよ、なんて題目をなぜか信じこんで、党派間の闘争も殴り合いどころか、殺人まで起こったからね。連合赤軍事件で、みんなも歴史としては知っているでしょう。あれは党内部での殺し合いだけど、とにかく自分が仲間を殺すのは悪いことではないんだ、してもいいことなんだと信じられなければ、あんなに何人も殺せるわけではない。さらには、その後も戦いを続けられるものじゃない。それをやらせたのもまた言葉の力なわけで、言葉の力というのはそれだけ強いもので、人をだますのもいい思いをさせるのも、他人を殺すのも自分を死に至らしめるのも、やっぱり言葉の力である。

じゃあ、この言葉の力って一体なんなんだろう。少なくともスーパードウエポンだってことはわかったんですね。このジェノサイドの武器にもなるスーパードウエポンだってことは。で、これを広告的地域から言えば、こういうものを世の中に振りまけば、人びとを一気に欲望の中にたたきこめるであろう、という言葉もあるかもしれない。かと思えば、少し投げかけておけば、ちょっとだけこっちの方向に歩いてきてくれる、という言葉もあるかもしれない。さっきの宗教の話の中に出てきた無言の力を演出するために少しだけまき餌をしておくというやり方は、広告ではとてもハイテクニクだし、逆に、これ以上は言わないよ、というやり方もあるわけです。最近では「ポリンキー」というCMが、これをわかりやすい形で使っていましたけど、やっぱりこのCMも、言葉のスーパードウエポンを薄めた形で、言葉の本質をよく突いてる広告だと思います。

この言葉という武器は、自分の身に余るほどの力を持っていることを知りながら、誰もが小出しにして使っている。例えば、この広告学命である、みたいに思えてくる。思ってるから、できるんです。でも、みんなもおそらく同じなのね。今日は雨が降ったからさぼろう、というのだって、本当にいけないことをしてると思ってるやっっている人はいないだろうけど、これもやっぱり言葉の力なんじゃないかな。

現実はずいぶん二人ひとりみな違う

糸井「別種の現実」という最初に出た言葉がありましたけど、これは「宗教」を定義するために出た言葉で、だとすると、僕は「現実」という言葉も定義されなさいとまずいんじゃないかという気がする。例えば、霊がいるということが宜保愛子さんの信者の間では「別種の現実」だとすると、霊のいないことはもう一つの「普通の現実」になるわけでしょう。でも、それじゃあんまりにもわかりやすすぎると思うんです。それならば、「カンがいい」とか「気が入ってる」とか「ツイてる」なんてことも、現実という言葉の定義によつては「別種の現実」になるんじゃないだろうか。というわけで、橋爪さん、現実ってなんなんでしょうね。

橋爪 すごく難しいこと聞いているって自覚、あります？

糸井 まあ、しょうがないね。(笑)

橋爪 これは非常に深い問題ですが、簡単に言います。現実は一

校に友だちを誘ってきた人は「ここに行くといざ」と、この武器を使ったわけだし、これはお母さんに「俺は大学に行く」と言つて月謝を払わせる力もある。みんな、言葉というスーパードウエポンを、大きく小さく使い分けながら生きていくわけ。「言葉の外部は言葉の内部で作られる」という話が面白いなと思ったのは、誰でも自分に武器を働かせるということ、無意識のうちに山ほどやっていますよね。これってある意味では宗教の始まりじゃないかと思うけど、言葉なしで生きてる人なんて、一人もいないんです。朝、起きて飯を食うだけでも、言葉抜きではおそろくありえない。こんなふうによつて便利で有効で、考えようによつてはすごく無駄だったりする複雑な特性を持った言葉をいうものの、その使い勝手を磨きながら、僕はその正体を見てやりたいものだと思つていた。正体を見られるはずがないのはわかっているけど、言葉を生んでいるのが言葉なんだから。だけど、その仕組みを覗きこんで死にたいものだという方向に、どうやら僕は進んじやったんじゃないかな。橋爪さんも、その正体を明らかな形で見たいものだと思つて学者になつたんじゃないのかな。

さらに言うと、人をこれだけがんじがらめにし、自由にすることのできる言葉というものを、僕らの世代ではスキャンダル雑誌の編集長になつて乗り越えようとした人もいるわけです。「噂の真相」という雑誌だけど、あれは、おまえらがだまされてる奴はこういうことをしているぞ、と暴くことで、「おまえらがだまされてる奴」という言葉の構造を明らかにする。そうすることで、言葉というものがまた別の形で見えてくるんじゃないか、と信じているんだと思う。

みんなはそう思っていないかもしれないけど、女性芸能雑誌を作っている人たちも、自分たちはやなことをしていると思つて作っている人はいない。勤め始めたときは違つても、知らないうちに「聖子がどうした」とか「誰だれは四度水子を作った」とかを記事にしていることが、さっきの連合赤軍の話じゃないけど、恥じることもない私の使

そのあたり、別の道を別の言葉を使いながら生きてきた橋爪さんとすり合わせながら話ができたら面白いんだけど、この先の話、一つ、質問から始めてみていいですか？

橋爪 いいですよ。

人一人にあるものなんです。だから、僕の現実とあなたの現実の違い、同じ現実を持っている人間はいない。これが、まず第一歩。

次に、その現実がどうやって現われたかというところ、一人一人がこしらえたものなんです。だから、子供のときというのは、現実ってあんまりない。親が二人いるらしいというの、初めから知つてたわけじゃない。わかつてきたわけでしょう。そういうふうな現実をだんだんにこしらえていって、大人になつて安定した状態になる。そうやって、それぞれ自分の現実を抱えながら社会を営むんだけど、みんな、一人一人現実が違うものなんだと思つていましたか？

糸井 思つてるはずないよ。

橋爪 そう、何か共通のものがあるはずに違いない、と思つてる。例えば僕の出した一万円札は相手もやっぱり大事に思つてるじゃないかと、みんなごはんを食べて生きてるじゃないかと、同じことを

興味深い人になろうよ。

いろはに「ピー」塾

講師

●秋山 晶 ●浅葉克己 ●伊丹栄徳 ●石井達矢 ●一倉 宏 ●糸井重里 ●魚住 勉
●小野田隆雄 ●岡田直也 ●さくらももこ ●佐々木文彦 ●佐藤雅彦 ●三枝成彰
●篠原勝之 ●中島らも ●仲畑貴志 ●長沢岳夫 ●堀井博次 ●真木 準 (五十音順敬称略)

塾生募集

・開講日 4月16日(木)以降毎週木曜日(24講座)
・募集人数 50名・時間 午後6時30分～8時30分
・入会金 5千円・受講料 11万円
◎ インターナショナルアカデミー
〒600 京都市下京区烏丸五條東一筋目下ル
TEL.075(351)6848



している部分が多いから、現実だって同じだと考えることにして、同じ現実を共有して生きているんだという信頼が生まれてきた。よく考えると、根拠がないんだけどね。

で、次に、そこに不思議な人が現われる。みんな間違った現実を信じてるけど、私は本当の現実を知ってますよ、という人が出てきて、別種の現実がばらまかれる。そうすると、いままで信じてきた現実が正しいのか、それとも新しい現実が正しいのか、二つの現実の争いが起こって、言葉の力と無言の力が争い、人びとの現実が再組織されていくわけです。そうやって、現実は何度も書き替えられていく。

糸井 ということは、現実が固定したものにはならない。
橋爪 そう、いつでも動いているんです。まあ、だいたい、日常の現実には、神様がいたりとか霊がいるとか、プラスアルファを付け加えるという形になります。

糸井 じゃあ、文化圏によっても、現実が大きく違ってくる。

橋爪 それは当然のことです。同じ地域に住む同じ民族だって、イスラム教出現の前と後では、だいぶ違った現実を生きている。だけど、彼らは改宗したなんて思っていない、本当の現実がわかったと思っていない。そりゃそうですよ。何か変わったものを見たからといって、それがそのまま現実になるわけじゃない。現実とはもつとトータルなもの、自分が作り出している情報の全体みたいなもので、その人間をすっぽり包みこむものなんです。そして、ある現実が急にふくらんで他の人もどんどん包みこんでいってしまったら、新しい社会ができる。宗教はそれを狙っているわけでしょう。

糸井 そうすると、不文律のように現実というのはあるわけですね。僕はさっき「カン」という言葉を引いたんだけど、日本では「あの人、カンがいいね」と言うと、現実としても確かにそうだしということがある。だけど、カンも、あとはツキなんかも、唯物論的には確かめられない。でも、それはあるとして、超能力もカンやツキの高度

なものなんだと言ってしまう。現実の中にぬるく入っていきけるんじゃないか。つまり、みんながカンを普通の現実だと思っていて、そのカンが七割当たるものだと考えてるところに、俺のカンは九割当てることのできる、みんなのいまの現実とほとんど変わらないけれど、九割のほうに導いてあげることもできるんだ、とうまく言えば、別種の現実という形をとらずに別種の現実のほうに連れていけるんじゃないか。これは、僕らもテクニクとしてはよく使うんだけど。

橋爪 貝なんかでも、貝柱って力が強いから、急に開けようとしてもダメなんですね。だましながら、ゆっくり開けると開く。そういうのと同じで、現実というのも、違う現実が急に現われてくると、自分を守ろうとして反発が起きる。だから、正体は現わさず少しづつ相手に違った要素を入れていく、というのは、一つの方法かもしれないね。

糸井 「幸福の科学」という話題の宗教がありますけど、あれなんかは「勉強しよう」として始まるんですって。それって、「別の」ということを上手に言い替えている言葉だと思いませんか。セールストークでも、「おばあちゃん、いいお天気ですね」から始まって、「YES」を何回も言わせつつ「別の」ところに連れていく。ソ連の崩壊で社会主義が大きな展開を見せているけど、宗教も、ああいったドラマチックな形で現実を標榜するものはなくなるんじゃないかな。もっとお母さんみたいな口調で「別」を表現する言葉や宗教が出てくると思うんです。

もちろん「別の」ものを直に目にしたときに出てくる拒否するエネルギーも重要ですけどね。いやよいやも好きのうちらなんて科白もあるけど、「いやだ」も強いインパクトのうちで、オセロのように一気に全部裏返して逆転、なんてやり方もある。だけど、これはやっぱり古典的な、生きることとはバクチだった時代の宗教のパターンだと思うんです。「二〇一回目のプロポーズ」なんかは、そういう懐かしさを機

軸にしている、僕は貧乏かもしれないけどついてこい、なんて冒険を

強いてまず最悪の状況に落とされてから手を差し伸べる、というやり方で作られている。でも、いま実際に行なわれている別の現実への誘いは、まず「いいお天気ですね」だったり、お母さんのように抱きしめたり、音楽という曖昧な共通言語だったりするんですね。昔の豊かでなかった、自分の人生の当たりはずれをいつも考えていなくちゃならなかった時代とは、「現実」をずらす必要がますます出ているんじゃないだろうか。

橋爪 そういう感じは、九〇年代のわれわれの社会には、確かに大きな傾向としてあると思います。ただ、いったん世界に目を向けると、事態はそう簡単でもない。英語でもロシア語でも中国語でも日本語でも、言葉が違えば、集団としてはつきり違う現実を生きている。

いま、民族問題が取り沙汰されてますけど、いままでも民族対立をどう乗り越えようとしてきたかという、民族を超えた現実を信じる、という作戦をとってきたわけです。アメリカだったら自由、ソビエトだったら社会主義とかね。そういう外国にも翻訳できるような大きな

「間」という無言の感性の中に日本人がいる

橋爪 現実というのは、作り出される要素と与えられる要素があるんです。で、日本人には、自分たちで現実を作り出す感覚が異常なくらいにないわけ。例えばマルクス主義が現われると、それを唯一の真理だと考えて共産党という組織を作り、みんなで足並みを揃えてザッザツと目標に向かって進んじゃう。アメリカだったら「自由」ということを言い出す人がいて、誰も住んでない大陸に渡って新しい国を作っちゃったりするでしょう。現実というのは国家を作ることであり、社会を作ることであり、街を作ること。なにかにまで手作りで作ることで、自分なりの現実というのは作り出せるんだから。その点、日本とアメリカは対照的ですね。日本人は、現実とは与えられているもの

だと思いきる。これはやっぱり母親の原理で、母親というのは自分がいてこそ子供が育つと思っているから、囲いこみすぎて、子供は母親の与える枠の中だけで育っていく。母親が現実の象徴になって、区別がつかなくなってしまうんです。

だけど、世界は日本と違って、現実とは作り出すものだという論理で動いているから、個人も自分なりの現実で生きていくしかないし、与えられた現実の中にも、どこかで破壊の予感がある。母親の胎内から違った現実の中に押し出されるんじゃないかという危機感がある。

糸井 ヨーロッパのキリスト教文化圏の人たちが、キリスト教のおかげで、自分たちで現実を作るといふシステムを持っていたのは大き

いんでしょね。

橋爪 さっきの契約の話がまさにそうで、いままで日常生活をしてきたところに神様がやってきて、「おまえたちはいままで間違っていた。今日からこういう約束で社会を作りなさい」と命令する。そのことが、キリスト教の一番根っこにある。これはキリスト教に限らず、ユダヤ教でもイスラム教でも同じです。そうすると、民族に関係なく新しい生活を始めなきゃならないから、いまの現実社会は、すでにみんな作られたものなんです。

糸井 宗教のシステムを、他のものも応用してですね。共産党だったら聖書は党の機関紙にしようとか、司祭は書記長にしてみようとか。大川隆法さんもお父さんが共産党員だったらしいけど、「幸福の科学」もシステムの作り方は、これまでと同じ、カッコ内の空欄を埋めるという発想で成り立っている。だいたいどんな宗教でも、空欄を埋める形になりますね。だから、いまあるものほとんどはパロディでしかなくて、新しく作ったものはないんじゃないかという気さえ僕はしているんだけど、たぶん、新しく始めると、何かが足りないって誰かが気づくんです。システムの中のこの部分が足りないって。だから、企業の中での会議だろうが友だち同士だろうが、みんなが大好きなのは空欄を埋めること。システム自体を疑うことなしに、いままでのものがボロになるうがどうしようが、日本人はシステムの空欄を埋めることだけにひっちゃきになってきた。

ただ、それは明治維新以後に入ってきた西洋のシステムの真似だから、やっぱりどこか使い勝手が悪いのね。とすると、その前になんとかなっていた別のシステムを日本は持っているのかな、という淡い期待が僕らにはあったりする。いまの江戸ブームの原因の一つは、パロディでしかないいまのシステムをもう一回見直すために、かつてあった別のシステムを探る流行現象だと思うんです。

橋爪 確かにそれはその通りなんですけど、でも、日本にあるもので

外国から来なかったものなんてないんですよ。江戸時代にあった仏教だって儒教だって、みんなよそから渡ってきている。だから、これはなかなか根の深い問題だと思う。

糸井 これはいまなんとも思いついたんで、うまく整理して言えないんだけど、おそらく日本にも、伝承してきたものとがあると思うんです。換骨奪胎とか日本流の工夫とかいう言い方をよくするけれど、日本は西洋型の民主主義も母系的に変化させて上手に使ってきたし、資本主義も昔からあったタテ型の構造をうまく発展させて、長持ちさせてきた。最近、僕自身浮世絵だの歌舞伎だのをずいぶん見るようになったんだけど、好きで見ると、これはよそから来たんじゃないな、というものがあるような気がするんです。なんというか、日本固有のリズム感だと思うんだけど。

橋爪 リズム？

糸井 そう、リズム。「間」という考え方がありますね。これもさっきの「カン」と一緒に、ないと言えませんが、でもやっぱり、一九九〇年代を生きているわれわれでも持っているような、日本人固有の「間」というリズムがあるんじゃないだろうか。例えば中国に「待ちぼうけ」という話があって、「待つ」ことについて語っているけれど、タイミングについて話してはないでしょう。だけど、これが日本だったら、切り株にうさがぶつかる間が、すごく複雑に、言語化できないままに共通言語としてあるんじゃないかと思う。うまく説明できないけど、やっぱりこれは、すべて渡ってきたものの組み合わせだと考えるわけにはいかないんじゃないか。

橋爪 その話、僕の言ったことと矛盾してないと思いますよ。「間」というのは言葉と言葉の間にあるわけで、それ自体は言葉じゃない。ある意味では無言の力です。日本人の場合、無言の力というのは、おそらく感性なんでしょう。自分にとって都合がいいか悪いかは感覚でわかるし、そういう意味では判断力もある。ただ、それがなぜ

かを言葉にするのはできないし、しようとも思わない。一番いいやり方で配列して、それで終わっちゃうんです。

糸井 見本を見せ合って、型として伝承していくわけですね。

橋爪 そうそう。それがスタイルになってる。

糸井 で、ひよっとしたら、この「間」というのは無言の力、つまり黙っている時間、表現しない時間の中に含みこまれる何かが培ってきたもののかな、という推理ができるんじゃないか。

橋爪 禅宗によく似ていますね。禅宗は、ほとんど無言の力でできているから。

糸井 何も教えないんですもんね。

橋爪 「不立文字」と言って言葉ではしゃべらないと言う。でも、これも他の仏教と同じ構造で、やっぱり言葉の内部で成り立っている

言葉を使った差異のゲームの中で人は生きている

橋爪 実はもう次の話もだいぶしゃべっちゃったんだけど。(笑)

糸井 じゃあ、適当にはしょってください。(笑)

橋爪 さっきは宗教の話をしました。今度は言葉です。

言葉というのはあまりにも日常的にわかりすぎていたために、いままでは誰もみっちり考えたりしなかった。つい最近です、ソシユール

という人が出てきて、言語は記号の一種だと言ったりしたのは、で、そう言われてみると、確かに言葉というのは記号です。

まずこの「記号」を先に定義すると、記号というのは、《それ自身とは違った何かを指し示す》という性質があります。例えば、手で遠くを指差したとしますね。手を見る人と手の指している方角を見る人

本づくりの基本から編集センスの磨きかたまでレクチャーします。

編集学研究所講座

受講生募集

・開講日4月15日(水)以降毎週水曜日(23講座)
・募集人数50名・時間午後6時30分～8時30分
・入会金5千円 受講料10万5千円
◎インターナショナルアカデミー
〒600京都市下京区烏丸五条東一筋目下ル
TEL075(351)6848



講師 ● 赤瀬川原平 ● 嵐山光三郎 ● 安西水丸 ● 泉麻人 ● 稲越功一 ● 木下明美 ● 見城徹
● 島森路子 ● 新谷雅弘 ● 高樹のぶ子 ● 中沢新一 ● 中西亮 ● 長友啓典 ● ねじめ正一 ● 花田紀凱
● 林真理子 ● 松岡正剛 ● 松木直也 ● 松田哲夫 ● 南伸坊 ● 村松友視 (五十音順・敬称略)

がいたとしたら、この手が記号として使われている限りは、指された
方角を見るのが正解。手そのものを見ちゃった人は、記号を理解して
いないってことだから。つまり、手は記号そのものであると同時に、
記号によって意味されるものを指し示すためのものでもある。こんな
ふうに、記号には必ず二重の働きがあるんです。道路標識でもなんでも、
記号と呼ばれているものは、みんな同じ構造を持っています。

記号が定義できたところで、次に「言葉」です。言葉も記号の一種
ですから、例えば「ことば」と言った場合、さっきの手にあたるの
は、「ことば」という音そのものであり、手が指し示していたもの
は、「ことば」の音そのものとは違うあるアイデアであり意味ですね。
では、記号や言葉には、指し示すという働きがどうして可能になる
んだろうか。

糸井 ふーむ、難しいねえ。

橋爪 難しいでしょう。(笑) 考えはじめるの十年くらいかかるんで
すけど、既にもう十年考えた人がいるので、結論が出てるんです。

糸井 ありがたいねえ。(笑)

橋爪 記号や言葉というのは、差異の体系なんです。道路標識だ
って、もしもみんな同じだったら、止まればいいのか駐車禁止なのか
わからない。いろいろ違いがあつて、その違いが意味の根拠になつて
いるわけです。音だって、「あいいうえお」とかたくさんあるおかげで
違いを作れて、異なるものをさし示すことができる。これが、記号が
記号である理由ですね。定理にしますと、『差異が価値を生む』——
この場合の「価値」は、ソシユールによれば「意味」という意味です
が——ということになる。これは商品戦略の基本でもあつて、みんな
違うものを着てるのがいいことだとすれば、変わった服を作れば売れ
る。それをみんなが着るとみんな同じになってしまうから、また違つ
た服を作ってどんどん売ればいい、という原理になるんですね。

糸井 服は違いますけどね。同じであることが重要だったりす

るから。お菓子とかビールにしてくれたらよかった。

橋爪 はいはい。で、この一九六〇年代に再発見された定理は、商
品戦略にいいというので、七〇年代八〇年代と業界を席捲した。

ただ、これで言葉の問題を全部解いてるとは、僕は思わない。確か
に違いがなければ言葉の意味は表わしようがない、その点で差異は本
質的だけれど、でも、差異のあることが誰かに伝わらなければ、意味
というのは伝わらないでしょう。差異がわかってるのは誰なのか、
どうして差異が差異だとわかるのか、というメカニズムについては、
この定理を作った構造主義の人たちは何も言っていないんです。

糸井 つまり、雷おこしが喜ばれるところに、最近都会で評判のい
い、でもなんだかよくわからないお菓子を持っていっても喜ばれな
い、という感じですね。

橋爪 非常にいい線だと思います。(笑)

糸井 田舎から来るお母さんに新宿の都庁舎を見せずに帰してしま
うような。(笑)

橋爪 で、ポスト構造主義より新しい思想はいまのところないので、
ここは先祖帰りをするんですが、ヴィトゲンシュタインという人
が考えた言語ゲームという考え方があります。言葉がわかるというの
は誰かが言葉を使うからだし、さっきのように、手で何かを指したり
するの、僕が手でそういうことをしない限り、記号にはならない。
ということは、あらゆる違いの背後には、その違いを利用して何かを
伝えようとしている人びとの行動があるはずだ。人びとが言葉を使い
合い、意味を伝え合っていること、これがヴィトゲンシュタインの言
う言語ゲーム (Language game) です。大勢の人が似たようなことを
やっているから「ゲーム」であり、言葉を使うから「言語」ゲーム。
言語ゲームによれば、差異というのは、「使い分け」ということにな
る。使い分けるから、差異がある。わかってみれば、当たり前のこと
ですが。

そうすると、また次の疑問が出てきます。人間はどうして言葉を使
うことができるのだろうか。こんなこと、考えなくてもいいみたいだ
けど、こういうことを考えるのが哲学なんです。(笑)

では、答です。「原理上答えられない」。人間を、言葉を使うことと切
り離して別の実体と考えれば、こういう疑問が生まれるけれど、言葉
をこんなふうに使うものを人間と呼ぶ、と考えれば疑問はなくなる。

糸井 あいつはああいうやつなんだよな、つてやつだな。(笑)

橋爪 そう言うともふたもないけど、哲学上は重要な転回、言語
論的転回というんです。この前提は絶対的であり、どんな哲学も乗り
越えることはできない。なぜならば、哲学は言葉を使って疑問を發
し、答を与えるものだから、われわれは言葉を使っている、というこ
とが出発点になる。だから、哲学の範囲内では答えられないんです。
さっきから出ていた「現実」という言葉で言えば、何人も否定できな
い究極の現実。これを、ヴィトゲンシュタインという人は発見したん
です。わかりますね？

糸井 ほんとーにわかるかどうかは別として、わかるな。(笑)

言葉のルールを守ってフェアに戦おう

橋爪 いま言いましたように、人間が言葉をしゃべってコミュニケ
ーションしているのは、人間の究極の現実ですね。何人といえど、そ
こからは離れられない。だからこそ、そこにうまく乗っかって、いろ
いろな現実を見せるといふテクニクがあり、宗教もその一つだつた。

例えば中世を考えてみると、いるかどうかかわからない神という現
実をみんなに配り、同じ現実を共有させて、人びとを統合したでしょ
う。いま、封建的な主従関係や階級関係、伝統社会というようなもの
をぶっ壊していこうという歴史の大きな動きがあるとすれば、この昔
ながらの神という現実からは脱却して、もっと違う、人間が必ず背負
わなくてはならないただ一つの現実を見つめることで、人びとは人類

としてまとまろうとしているんじゃないだろうか。

その代表的なものは科学ですね。科学は人種、民族に関係なく、実
験室で実験ができるから、正しいかどうかはすぐにわかる。そういう
意味で、ただ一つの現実をわれわれに見せてくれる。同じように思想
も、神やもう一つの現実、信じて信じなくてもいいもの、そうした
ものを全部はぎとって、赤裸々な人間のただ一つの現実に立脚するの
が必要なんじゃないか。そういう方向以外に争いをなくす道はない
と、私は思う。その意味で言語ゲーム論は重要だし、言語ゲーム論に
よって宗教を解説してその手口を明らかにする、ということをやった
のが、私の『仏教の言説戦略』なんです。

糸井 それって、僕はよく言われるんです。魚屋なりになんか考え
てるのが難しいこと考えてる人と同じときがあつて、インテリの人に
いやがられたりする。(笑)

橋爪 いや、僕はうれいいます。

糸井 そうですか。よかった。(笑)

糸井 手口を明らかにする、ということについては、橋爪さんの本

を読んでいると、僕もとても共感するんです。つまり、言葉という武器について、僕自身がどうだまされたかわかりたいし、だましてるかもわかりたい。だまされないうことは、世の中にはないと思うんです。それぞれが違う現実を持っているんだから、「これ、おいしいよ」と言うだけだつて、だましていることになる。その手口を知っているのと知らないのでは大違いだし、俺もやられたな、と思うこともしょっちゅうある。最初のテーマが宗教だったから、「あらゆる現実実は宗教だ」って言い方をしようと思って言い忘れてただけで、ここまでくると「あらゆる現実には言葉だ」っていうふうにも言えるね。

岸田秀さん風に言えば、「あらゆる現実には幻想である」ということになるんだけど、その幻想のやりとりの中で、人というのはほんとにも簡単におかしなところに行ってしまう。そうすると、究極の倫理はどこにあるのか、みたいなことも、次のテーマになるような気がしますね。つまり、いやなところに行ってしまったっていいじゃないか、という倫理だつて成り立つわけで、人殺しをしたって、人類が破壊したっていいじゃないかというのも別種の現実を抱えた倫理ということになる。だから、その拠って立つところというのも、ヴィトゲンシュタイン風に解明しなければならぬと思う。

でも、どうなんだろう。非常に大きな迷惑というかな。自分がやっている迷惑だとか、思想が新たな大きな迷惑を生んでしまう現実だとか、そういうものを僕らが目にしている、ああ、よかったと思ったり、同じだまされ方がまだ通用するんだなとがっかりしてみたり、死ぬまでに解決できるようなものじゃないんだろうけど、そういうことが、自分をまだ考えさせる原動力のような気がするんですね。

橋爪 いまは冷戦が終わったりして、いままでも世界を支えていた枠組みがガラガラと政治的に崩れていきますけど、七〇年代の全共闘の頃の僕というのは、左翼の最後の可能性を、もうダメだと思いつながら

一応信じてみる、という感じだった。すでに頭の中ではベルリンの壁も含めてすべてのものがガラガラと崩れていたから、その先のことを考えるのが課題だったんです。

で、構造主義のこととか言葉のこととか社会のことをてくてくてく考えてきて、その結果思ったのは、もう崩れるようなものに自分の身体を預けるようなことはやめよう。それがたとえ善意から出たものではあっても、自分にとっても社会にとってもいいはずがない。大事なものは、誰でもが共通に立つことのできる最小限の基盤を探り当てていくことじゃないか。思想というのはきらびやかに知識を積み増していくことではなくて、言葉のやりとりがどういうルールに基づいて、どういうふうに関わり合っているのか、そこをよく理解して、ルールを守り、自分もボクサーの一人になって、やつついたりやつつけられたりしながら、作っていくものなんだろう。ダメな思想になったら観客の前でギャッツとやられることも大事だし、あくまでもフェアにみんなをやっていく。そういう態勢を作ること、また思想なんだと思います。

糸井 フェアに、というのは実際には非常に難しいだろうけど、でも、その感じはわかりますね。フェアに、としか言いようのないものが、いまはすごく大事だつて気がする。僕は、現代思想がファッションになってしまった理由は、やっぱりフェアじゃなかったせいじゃないかと思う。何がフェアじゃなかったかという、ちょうど僕らの学生時代でもそうだったけど、二年生の論客と四年生の論客がいると、四年生が妙な力で勝ってしまうのね。どっちの理論が正しかったかではなくて、マキャベリズム的なテクニク、言葉の扱いの慣れだとか経験だとかで勝ってしまう。それって、フェアじゃないじゃない。で、思想家も学者もたくさんいるけれど、あらゆる論争の場面を見ていると、残念ながら、フェアに語られている論争というのはあまり見うけられない。

支えられているんだから、自分を人間だと思つて行動するとしたならば、その究極的な現実にとこまでコミットするか、という問題になるんだと思う。だから、あんまり答えにはなっていないけど、とにかくやるっきゃない、という。(笑)

糸井 でも、予感のようなものはありますか？ 例えば橋爪さんの本を僕が読んで、フェアさを感じて、一人読者が増えたわけでしょう。そんなことでも、昔とはまた違うと思うんだけど。

橋爪 いまの話を短期的に見れば、僕が僕の本の中にどれだけ本質を書けるのか、ということになるわけだから、解決すべき問題は山のようにある。でも、長期的に見れば、僕がこういうことを考えるのもある必然があつて、僕がやらなくても誰かがやるし、そういう意味では、大きな流れの中の何かなんじやないかと思うんですね。

糸井 いま橋爪さんが言ったような立場の取り方というのは一つあって、それは広告屋でも魚屋でも土建屋でも同じなんだと思うんです。で、同じような現実にはちゃんとあるスタンスで向かっている人同士が離れて暮らしている、といううつくしさが、僕はすごく好きなんです。だからどう、というわけではありませんが、こういう場でこういうお話ができたことに感謝して終わりにしたいと思います。(拍手)

(91年10月24日「広告学校」特別対談より)

でも、はたしてこれから、そんなふうになっていくのかなあ。
橋爪 僕の定義によれば、人間というのはこういう究極的な現実

●内容

●講師

自分の生活体験を内観する・ことばに目覚める・エッセイ文作成法
時代と個人の関係を知る・発表・検討会……全10回
安部敏行 クリエイティブ・ディレクター&コラムライター

『自分を物語るエッセイを書く』講座

●会場 代々木の日本プロデューサーズアカデミー
●定員 50名 ●受講料 50,000円
3月初旬スタート(毎週月曜日18時45分〜20時45分)

お問い合わせ・お申し込み

メディアコミュニケーション研究所

(主宰 安部敏行 石川明子)
(事務局 田窪朱実)

〒171 東京都豊島区池袋2-39-5
COSMY2-302号(株)メディアポンド内

TEL.03-5396-6861
FAX.03-5396-6864